

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

オーストロネシア語族と日本語の系統関係

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): anaphora language mixing Oceanic languages tonogenesis Tungusic 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004071

オーストロネシア語族と日本語の系統関係

崎 山 理*

Genetic Relationships between Austronesian and Japanese

Osamu Sakiyama

本論は、筆者が手掛けてきたオーストロネシア語比較言語学のわくを、日本語の系統論にまで拡大しようとするものである。日本語の系統は、現在も、南インドあたりまでルーツを求めにゆくなど、けっして安定した研究期にはいったとは言えない側面がある。筆者は、このような異常な状況を生み出してきたのは、縄文時代以降、日本語が形成されるにさいして経過した長い歴史、またそれと関連するが、日本列島に居住していた異なる民族間で発生した言語混合による結果であるにとらえ、すでに幾本かの論文を発表してきた。さいわい、昨秋、日本言語学会におけるシンポジウムで、これまでの論拠を集大成する機会が与えられたのを機に、会の限られた時間内で十分報告できなかったこと、またそのときのコメントにも答える形で、本論を仕上げている。

It is becoming evident that “mixed languages,” such as Medniy Aleut (Russia), Maisin (Papua New Guinea), or Michif (Canada), do exist. Japanese may have arisen as such a mixed language, combining Tungusic and Austronesian elements.

It is believed that Ancient Japanese (AJ) introduced a pitch accent and long vowels as compensation for the loss of an Austronesian syllable. Some evidence comes from roots where Austronesian has two syllables, of which Group 1 in AJ preserves the penult (ex. PMP **táŋgan* ‘hand’ > AJ **taa* > **ta-i* (determinative) > Kyoto dialect *tee*) and Group 2 the final (ex. PMP **apúy* ‘fire’ > AJ **pəi* > Kyoto d. *hii*). Accent is irrelevant in words in Group 3, which are estimated to have an even tone in PAN (ex. PWMP **esung* ‘mortar’ > AJ *usu* > Kyoto d. *usu*).

* 国立民族学博物館民族文化研究部

Key Words : anaphora, language mixing, Oceanic languages, tonogenesis, Tungusic
キーワード：前方照応、言語混合、オセアニア諸語、声調発生、ツングース諸語

Next I refer to the AJ pronoun system reconstructed from Old (Nara period) Japanese (OJ) data, on the left:

Singular		Plural		Singular	Plural
I	*a, (*na)	we	*mæi	<	*a, (*ya) *mey
you	*na, (*i)	you	—	<	(* (k)u) (* (k)wa)
he/she/it	*i, *i-e	they	*si, *se	<	*i, *e, *na *si, *se

The right hand column indicates Proto-Central-Eastern Malayo-Polynesian forms reconstructed by A. Capell (1969, 1976) and revised by myself.

There is also important syntactic evidence. In most CEMP languages, pronominal affixes usually occur in a verb complex in what I call a rigid “affix order,” i.e., the verb itself may take prefixes and suffixes that are grammatically fixed. In OJ also we find traces of similar affixation:

Kena-no waku-go i pue-puki-noboru. (*Nihon-Shoki*, vol. 17)

“A young prince of Kena, HE (=i, III sg.) is going up (a river) blowing a flute.”

Tōsi-no-pa ni, ayu si pasira-ba, (*Man’yo-Shu*, vol. 19)

“Every year when *ayu* fishes, THEY (=si, III pl.) run,”

I cannot agree with the view that *-i can be explained more successfully through ‘Altaic.’ OJ as well as Austronesian *i* have a locative function, which the Altaic suffix never does.

- | | |
|-------------|------------|
| 1 言語混合と混合語 | 4 人称代名詞の体系 |
| 2 音韻変化と音韻対応 | 5 おわりに |
| 3 接頭辞の起源 | |

1 言語混合と混合語

複数の言語が接触し、接触したそれぞれの言語の文法部分に変化が現われることもあれば、それぞれの言語の文法部分が提供されて、新たな一つの言語が生みだされることもある。後者は混合語と呼ばれ、ピジンあるいはクリオール（母語となったピジン

ン)はその一つのタイプである。混合のため文法のどの部分が提供されるかということは、接触した各言語ごとに異なるが、あらゆる部分からの供出が起こることが明らかにされている (Thomason and Kaufman 1988)。また、接触する言語の特徴によってピジン化や混合の仕方もかならずしも一様ではない (Sebba 1997: 264-269)。

ピジンは言語混合の一つのあり方で、言語混合と同義で論じるべきでない (Holm 2000: 11)。ピジンには横浜ピジンのような一世代的 (片言的) な形態からオセアニアのメラネシア・ピジン (Tok Pisin, Bislama, Solomon Pijin) のように約3百万人によって使用される国家語までさまざまである。もとの言語の話し手にとってピジン化した新しい言語は、彼らの言語が単純化した (舌足らずの) ように聞こえる。ピジンはもとの言語の非体系的部分の合理化を行なっている場合も少なくない。しかし、ピジンは表現可能な内容が限定された不完全な言語だと信じている人が言語学者を含め後を絶たない。従来、比較言語学では一つの言語における歴史的な混合という現象を原則として認めない。混合言語を認めることは、比較言語学の依って立つ「語族」という概念の成立基盤を揺るがしかねない危険思想でもあるからである。したがって、混合の事実は認めるとしても「混合はピジン英語や隠語にみられる程度」という偏見をもち、「混合語」の成立が安易にうんぬんされるのが残念である、などと公言した言語学者すらいる (服部 1967: 10)。

言語混合を認めない立場から、最近も R. A. Miller (1991), A. Vovin (1994) らアルタイ語学者による日本語における AN 系統批判説は予断に満ちた論である。従来、「南方」の言語との系統論はある特定の現代語 (通常、マレー語、ポリネシア語!?) だけを取り上げての荒い論であることが多かった。それは、あたかも『アイソーボス寓話』の「葡萄はおおいに酸い」のごとくである。

近年、混合語として有名になったのは Mednyj Aleut (Copper Island Aleut) で、19世紀初め Russian との言語接触の結果、Aleut の人称・時制接尾辞が Russian の動詞活用語尾と置き換わるという事態が起こった。しかし、Aleut のそれ以外の文法部分は変化しなかった。Mednyj Aleut の場合は、言語混合の可能性を探るための、いわば実験であったといわれるが、まさに言語の混合が実現したのである。

表 1

要素	Sri Lanka Malay	
	Tamil	Malay
語彙	少ない	多い
代名詞		すべて
小辞	後置詞, 接尾辞	接頭辞
語順	SOV	
修飾	修飾語-被修飾語	被修飾語-修飾語

このほかにも、パプアニューギニアの *Maisin*、カナダ・アメリカにまたがる *Michif* が報告されている。17世紀半ばにスリランカに移住させられ、現在、約5万人の話者がいる *Sri Lanka Creole Malay (SCM)* も混合語である。その混合性の重要な証拠として、SOV になったにもかかわらず、接頭辞が存在するという事実を指摘することができる。表1に *Adelaar (1991)* からその特徴をまとめる¹⁾。

最初に、SCM と Malay (Mly.) の例文を示す。

Se se-pe-bini-ka duit nya-kasi.
 「私 私-の-妻-に お金 過去-あげる」
 Saya suda(h) kasi(h) duit kə bini saya.
 「私 完了 あげる お金 に 妻 私」

1) 語順が SOV となったのはスリランカの *Tamil, Sinhalese* の影響を受けたためであるが、言語的素材のほとんどは Mly. を引き継いでいる。この例からもわかるように、言語混合は先住民に匹敵する量の外来者がないと不可能 (小泉 1998: 216) とか、文法と単語が別の系統から来るのは難しい (小泉 2000: 11) などというのは偏見にすぎない²⁾。

2) SOV 化による後置詞の発生が、Mly. の前置詞から行なわれている。Mly. *kə* > SCM *-ka* 「に、で」、Mly. *dəngan* > SCM *-de/dang* 「と」、Mly. *dalam* > SCM *(-pe) dalam* 「で、の (-pe) なかで」。

3) Mal. の接頭辞は、その機能を弱めているが、Mly. *kə* > SCM *ka-*、例: Mly. *kə-dua* > SCM *ka-dua* 「第二」、Mly. *kə* > SCM *ku-*、例: *kə-temu* > *ku-tumu* 「会う」、Mly. *pər-* > SCM *pu-*、例: *pə(r)-kərja-an* > *pu-kurjan* 「仕事」、Mly. *bər-* > SCM *bu-*、例: *bər-təriak* > *bu-trak* 「叫ぶ」、Mly. *tər-* > SCM *tu-*、例: ?、のような Mly. 本来の接頭辞のほか、SCM を形成したインドネシアの地方語から *nya* (「本当に」、*Sundanese*?) > *nya-* 「過去」のような例も、わずかに見られる。

4) Mly. の接尾辞は、*-akan* > SCM *-king*、例: *marah* > *mara* 「怒った」/ *mara-king* 「悩ます」、Mly. *-an* > SCM *-an*、例: *pukul* > *pukul* 「打つ」/ *pukul-an* 「打撃」がいまなお生産的である。

5) 連体修飾には両者がみとめられるが、被修飾-修飾は成句的になった表現が多く、修飾-被修飾がより生産的である。例: *tangan kiri* 「手-右」: *pam pohong* 「ヤシ-木」。しかし、助動詞、否定辞、禁止辞は動詞の前に置かれ、SOV の類型論から

すれば変則性が残る。SCM が今後どのように変容するのか、言語動態論的に興味深い。

2 音韻変化と音韻対応

比較言語学および考古学の成果を総合した結果、現在、オーストロネシア語族 (AN) の下位区分は、次のように行なわれる。AN はまず Formosan (Fo) と Extra-Formosan とに別れる。その最初の分岐は紀元前 4 千年から 3 千年の間に台湾で起こった。これは日本の縄文時代中期に相当する。台湾を去った Extra-Formosan が、現在、Malayo-Polynesian (MP) と呼ばれる。さらに紀元前 2 千年以前に、MP は Western Malayo-Polynesian (WMP) と Central-Eastern Malayo-Polynesian (CEMP) とに別れ、後者から Central Malayo-Polynesian (CMP), South Halmahera-West New Guinea (SHWNG) と Oceanic (Oc) が生れた (Bellwood 1997: 100-106; Lynch 1998: 47)。CMP と SHWNG は Oc とも共通した特徴を保持する一方、イリアンジャヤ、インドネシア西部に先住したパプア諸語からも多くの言語干渉をうけて形成されたと考えられる。

なお、本稿での PAN (PMP, PWMP, POc) の再構形は Wurm and Wilson (1975), Blust (1980-89) による。また『万葉集』(巻: 歌番号), 『古事記』, 『日本書紀』の引用は日本古典文学体系本 (岩波書店) による。

原オーストロネシア語 (PAN) の語末子音は古代日本語 (AnJp) で原則的に脱落し開音節化する。この傾向はオーストロネシア語族 (AN) の周縁部、西の Madagascar (Mdg.), 東の CMP, SHWNG, Oc (Polynesian では徹底して) に現われる音韻現象である。そして北の日本列島に達した AN にも同じ音韻の傾向が現われたとして当然である。例えば、PAN の子音終りの *tangis/*maN-tangis (前鼻音化形)「泣く」は、Mly. tangis/mə-nangis, Tagalog tangis/ma-nangis と変化するが、Mdg. tani, Fijian tangi, Samoan tangi などでは語末子音を失い、AnJp nangə-/nagə にもそれを反映している。ただし、Mdg. で開音節化は母音を付加することによっても行なわれ、PWMP *lesung/*esung「白」(> Mly. lasung, Tagalog lusong) は laun-a となり、AnJp で usu へと変化する。

なお、PAN は 4 母音 *a, *i, *u, *e (= /ə/) からなり (POc は *a, *i, *u, *o [< PAN *e, *aw], *e [= /e/ < PAN *ay] の 5 母音)、この傾向は琉球諸方言で現在も維持されているが、AnJp から OIjp にかけて行なわれた母音体系の再編成は、混合特徴

を考慮しなければ説明できない。日本語が高低アクセントをもつことは、日本語の源流を考えるうえでも重要である。AN は語根が複音節からなるのが原則であるが、PAN におけるアクセント体系は Fo とフィリピン諸語の比較からも明らかにされていない (Zorc 1993)。アジア大陸の、いずれも単音節言語で、PAN 語根の末尾音節は Proto-Kam-Thai (sic), 末尾第二音節は Proto-Mon-Khmer でよく保存されていると指摘されることも (Matthews 1996: 65), PAN のアクセントに体系性がなかったことの証左である。

AN の語根を日本語では単音節で継承している例がある。しかし、短縮した代わりに高低アクセントや長母音が発生した。これらは「代償的延長」(compensatory lengthening) あるいは「声調発生」(tonogenesis) と呼ばれる現象に属する。すなわち、PAN のアクセントを末尾第二音節にもつ語 (1群) と末尾音節にもつ語 (2群) とが区別され、それぞれアクセントのある音節が独立形として残る。3群は平板調の非弁別的アクセントである³⁾。(別表参照)

1群は京都方言では、ナア「名」、ハア「歯」、2群はヒイ「火」、イイ「亥」のように長母音となる。しかし、もとの単音節要素はナ-マエ「名前」、ハ-クキ「歯茎」、ヒ-ハチ「火鉢」、イ-ノーシシ「猪」のような複合語のなかで保たれている。京都方言のテエ「手」、メエ「目」という形は、それぞれ、**ta-i*, **ma-i* という二次的な合成語に由来するが、単音節要素は、ターナ-ココロ「手の心、掌」、マーナ-コ「目の子、眼」のように複合語のなかで保たれている。この -**i* は、後述する (3 6)i)AN の接尾辞 -**i* と考えられる。またこの -**i* は、上代日本語 (OJp) の、いわゆる乙類母音の発生とも深く関わっている (阪倉 1990: 296)。3群のウモ/イモ「芋」、ウス「臼」は PAN の各音節の要素を維持する。このような複音節の単音節化による音韻的代償の結果、声調が、西暦10世紀以降、中国・海南島に移住したインドネシア半島占城国のオーストロネシア語族チャム人の後裔、回族の回輝語 (WMP, Hui-hui Hua = Utsat(!?), 正しくは、自称: U¹¹ Tsaan²¹「占人」、言語名: Poi²⁴ Tsaan²¹「占語」) でも発生しているのは注目すべき現象である⁶⁾。

3 接頭辞の起源

AN は体系的な接辞法をもつことで特徴づけられる。ことに接頭辞の発達は著しく、接尾辞、接中辞がそれに継ぐ。次に PAN の単一接辞体系が諸言語でどのように継承されているかを示す。ただし、例示した言語のいずれにも存在しない接辞については、

別表 音節縮約と高低アクセントの発生

原オーストロネシア語 (PMP, PWMP, POc を含む)	チャム語 (ヴェトナム)	回輝語 (海南島)	古代日本語	平安末期 『類聚名義抄』	現代語 (京都方言) ⁴⁾	
1 群						
*tangan 「手」 MP	tangin	ngaan ³³	*taa > *ta-i	テエ	ター/テエ	「手」
*mata 「目」 MP	murta	ta ³³	*maa > *ma-i	メエ	マー/メエ	「目」
*(ng)ajan 「名」 AN	angan	nan ³³	*ngaa > *naa-	ナア	ナー/ナア	「名」
*baRang 「白歯」 WMP	—	—	*baa	ハア	ハー/ハア	「歯」
*[d/D]angaw 「小屋」 WMP	—	—	*daa	ヤア	ヤー/ヤア	「屋」 (首里方言)
*kaen 「食べる」 AN	—	—	*kaa > *ka-i	ケエ	—	「(御)食」
*pakan 「緯糸」 WMP	—	—	*paa > *pa-i	ヘエ	ヘエ	「綜」
2 群						
*apuy 「火」 MP	apuy	pui ⁵⁵	*poi	ヒイ	ホー/ヒイ	「火」
*babuy 「猪」 WMP	pabuy	phui ¹¹	*bui > *wai	キイ	イイ	「亥」
*huw[a/e]y 「籐」 MP	huay	vaai ³³	*wōi	キイ	イイ	「藺」
*kamey/*mōy 「我われ」 AN/Oc	kami	mi ³³	*mōi	ミイ	ミイ	「身」
*tuwak 「ヤン酒」 WMP	—	—	*waa	(ミ)ワ	—	「神酒」
*lumut 「藻」 MP	—	—	*moo	モオ	モオ	「藻」
*m-inum 「飲む」 MP	murnyum	(hui ³⁵)	*nomə-	ノミ	ノミー	「飲み」
3 群						
*(q)umbi 「芋」 MP	habei	phai ¹¹	*umo/*imo	イモ	イモ	「芋」
*[le/e]sung 「臼」 WMP	lathung	sung ³³	*usu	ウス	ウス	「臼」
*kahiw 「木」 MP	kayow	ʔiu ⁵⁵	*kui > *kōi	キイ	ユー/キイ	「木」
*kapis 「貝 (マドガイ科)」 WMP	—	—	*kapi	カヒ	カイ	「貝」
*birbir 「縁」 WMP	—	—	*bir-u	(クチ)ヒル	(クチ)ビル	「唇」
*pangil 「足首」 WMP	—	—	*pagi	ハギ/ハギ	ハギ	「脛」
*sinaR/*silak 「光」 MP/WMP	—	—	*sira-/siro	シラ/シロ	シラ-ム/シロ-イ	「白」 ⁵⁾
*kelap 「闇」 WMP	—	—	*kura-/*kura-i/*kuro	クラ/クレ/クロ	クラ-イ/クレ/クロ-イ	「暗/黒/暮」
*awang 「空」 MP	—	—	*awa/awo	アワ/アラ	アウ-イ/アウ-イ	「淡/青」
*a(ng)kat 「昇る」 MP	—	—	*aka/*aka-i/*aga-	アカ/アケ/アガ	アカ-イ/アケ/アガ-リ	「赤/明け・朱/上り」
*tipis/*nipis 「薄い」 WMP	lipih	pi ⁵⁵	*tipi-	チヒ (サ)	チイ-サイ	「小」
* (q)isep 「吸う」 WMP	—	—	*supə-	スヒ	スイ	「吸い」
*maN-dakep 「抱く」 WMP	—	—	*man-dakə-	ムダキ	ダキ-	「抱き」
*maN-tangis 「泣く」 AN	—	—	*nagə-	ナキ	ナキ-	「泣き」
*suwan 「掘り棒」 WMP	—	—	*suwa-i/*uwa-i	スエ/ウエ	スエ/ウエ	「据え/植え」

省略する。Fo, WMP (Mdg. を含む) はもっとも洗練された接辞法をもち、複合接辞 (bifix) や共接辞 (confix あるいは circumfix) も発生させている。また PAN に還元できない形も多く見られる。AN は東に向かうにしたがい、接辞の保持数が減少する。この点で AnJp, OIjp は東部インドネシアからオセアニアにかけての諸言語と同じ傾向を維持する。OIjp の文法ではこれら接頭辞を文法的に定義することを放棄し、強調を表わすとか、語調を整えるといった説明に終始する。しかし、起源からそのような状態であったと考えなければならない言語学的理由はないし、またこれらの言語間に対応する接頭辞を、単に無意味な「音添加」とみなすことは背理的ですらある⁷⁾。

次の表2のなかで OIjp と接辞配列がもっとも似たソロモン諸島の言語 (Nggela=Ngl.) と OIjp とを比較する⁸⁾。なお、PAN の接辞の記述は、基本的に崎山 (1974: 251-305) による。OIjp における接頭辞と複合語前項とを区別する基準はかならずしも明瞭でないが、阪倉篤義が OIjp におけるマ、サ、カ、タ、イなどは接

表 2

	Formosan (Fo) (+Yami)	Malay (W M P) (+Old M.)	Tagalog	Alune (CMP)	Solomon Is. (=Nggela, Bugotu, Lau)	Polynesian (=Samoan)	OIjp (+AnJp)
*ma-	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡
*maN-	(≡)	≡	≡		(≡)		(≡)
*maR-		(≡)	≡				
*pa-	≡		≡		≡		≡
*paN-	(≡)	≡	≡		(≡)		(≡)
*paR-		≡	≡				
*ta-	≡				≡	≡	≡
*taR-		≡					
*baR-		≡					
*mi-	≡						
*pi-	≡						
*ka-	≡	≡	≡	≡	≡		≡
*i-	≡		≡	≡	≡	≡	≡
*sa-	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡
*-i	≡	≡		≡	≡	≡	≡
*-(a)ken		≡		≡	≡	≡	
*-an	≡	≡	≡				
*-en	≡						
*-a	≡	(≡)					
*-in-	≡	(≡)	≡				
*-um-	≡	(≡)	≡				

頭辞として注目に値する（阪倉 1990: 302）と述べている点が、この配列を理解するうえで重要である。

1) **ma-* (性質, 状態) > Ngl. *rosi* 「裂く」 / *ma-rosi* 「裂けた」, *mbita* 「圧する」 / *ma-mbita* 「つぶれた」: OIjp マ垣, マ白し, マさやか, マ屢, マほら/ほろ (全ぎ) / **ma-bula-* < PAN **bulat* 「丸い」⁹⁾,

「おきていかば妹ばマかなし」(『万葉集』14: 3567)。

2) **pa-* (使役) > Ngl. *mate* 「死」 / *va-mate* 「殺す」, *rongo* 「聞こえる」 / *va-rongo* 「聞く」: OIjp ハさみ (挟) < PMP **sempit* 「狭い」 / *せま* (挟), ハふら (放, 祝) / ふら (振), ハがす (剝) / **paN-kas-* < PAN **kaskas* 「引っ掻く」, ハばか- (憚) / **paN-baka* < PMP **baka* 「矛盾した」。

3) **ta-* (偶発性, 無意図的, 完了) > Ngl. *mboha* 「壊す」 / *ta-mboha* 「壊れた」, *mindī* 「砕く」 / *ta-mindī* 「砕けた」: OIjp タ平, タ走る, タ遠し, タ繁, タ容易し, 「春霞タなびく山を君が越えいなば」(『万葉集』9: 1771)。

4) **ka-* (被災的, 受動) Ngl. *luba* 「ほどく」 / *ka-luba* 「とかれた」, *ndiku* 「よける」 / *ka-ndiku* 「消えた」: OIjp カ寄る, カ黒し, カ細し, カ擦る, カたむ/回む。

5) **sa-* (類似概念の派生) > Ngl. *opo* 「あふれる」 / *sa-opo* 「水を流す」, *vusi* 「早く動かす」 / *sa-vusi* 「懸命に漕ぐ」: OIjp サ衣, サ曇る, サ遠し。

6) **i* について原オセアニア語 (POc) の **i* と OIjp のイとの間には意味的集約性と機能的分化において明瞭な並行性が認められる。ソロモン諸語全般に共通の機能が見出せるが、以下は Bugotu (Bgt.) によって示す。

a) 人称冠詞 代名詞の強調形 Bgt. *i-goe* (II SG), *ii-a* (III SG), *i-gita* (I PL, incl.), *i-gami* (I PL, excl.), *i-gamu* (II PL), *ii-ra* (III PL): OIjp 人称代名詞 (二人称・卑下的),

「イが作り仕へ奉れる大殿の内には意礼先づ入りて其の仕へ奉らむとする状を明かし白せ」(『古事記』中・神武)。

b) 主格 PCEMP **i-* (三人称単数) としての前方照応的 (anaphoric) 用法については後述する: OIjp 主語の体言, 体言相当格に付く (副助詞)。

「毛野の若子イ笛吹き上る」(『日本書紀』継体)。

c) 処格 Bgt. *i taba* 「海岸に」: OIjp 場所。

「此の国土イ経を弘むるに頼る故に安穩豊樂にして遠脳無からしむ」(『金光明最勝王経』平安初期訓点)。

- d) 属格 *Bgt. dathe i botho* 「子供-の-ブタ=子ブタ」: OIjp 連体修飾語に付く (間投助詞・限定助詞)。

「玉の緒の絶えじイ妹と結びてし言は果さず」(『万葉集』3: 481)。

- e) 具格 *Bgt. i-dathe* 「木の実をつぶす石杵」, *i-tina* 「そのための石臼」: OIjp 語調を整える (接頭語)。イかり (碇) /か-かり (掛), イ (斎) 杭, イ垣。

- f) 地名の接頭辞 ソロモン諸島地名 *I-njo, I-tina, I-riri*: OIjp イ-岐佐 (生佐, 佐賀), イ-朽 (生田, 兵庫), イ-沢 (石和, 山梨) 等 (楠原他 1981)。

イ (=i) をもつ地名がとくに集中するのは鹿児島, 沖縄で, さらに台湾蘭嶼からフィリピン, マリアナ諸島を経てソロモン諸島, ヴェヌアツにいたる (Tryon and Gély 1979, 崎山 1993)。

- g) 場所・時間の接頭辞 *Bgt. i-vei/vei* 「どこに」, *i-ngiha/ngiha* 「いつ」: OIjp イづく/どこ: 動詞に付いて語調を整える (接頭語)。イ行く, イ抱く, イ出す, イます, イ懸る, イ副う, イ繼ぐ, イ向う。

- h) 方向 この用法は, 現在, 生産的ではないが, *Bgt. sele* 「ナイフで切る (Fijian の借用語)」/ *i-sile* 「入れ墨をする」, *Ngl. mboro* 「底」/ *i-mboro* 「てこを入れる」にその痕跡が認められる: OIjp 動詞に付いて語調を整える (接頭語)。イのり「祈」/のり-と「祝詞」, イ行く, イ抱く, イ出す, イます, イ副う。

この h) では, 動作のおよぶ場所ないし対象が, *i = イによって指示されている。

- i) 限定詞¹⁰⁾ ヴェヌアツ諸語 (Oc) に残るが, ソロモン諸語では属格として定着した。AnJp で部分を表わす語に **ta-i* > テエ/テ「手」, **ma-i* > メエ/メ「目」のような派生語を作ったほか, OIjp に *ama* 「天」/**ama-i* > アメ「雨」, *taka* 「高」/**taka-i* > タケ「岳 (高山), 丈 (身長)」, *mura* 「村」/**mura-i* > ムレ「叢, 群れ (村人)」のような語家族を残す。

- j) 後置冠詞 ソロモン諸語では報告されないが Biak (SHWNG, イリアンジャヤ) などの周辺に残存する用法で,

「みつみつし久米の子らが頭椎イ石椎イもち撃ちてし止まむ」(『古事記』中・神武)

の用例に類似する。なお, イを AN 起源とは気付いていないが, 安本美典に関連する考察 (安本 1998) がある。

OJp のイの本来の機能が主格助詞でなかったことは、以上に示した多機能からも明らかである。不変化詞イは、対象となる人・物や、それが置かれる、現われる、あるいは行なわれる位置や場所を指示する機能をもっていた。この語源となった PAN **i*, **-i* は、PAN の独立的小辞 **i* と無関係ではない。そのすべてに共通するのは、場所・対象指示（代名詞的）機能である。これまでイに対し、Korean (Kor.) の主格語尾 *-i*（ただし子音終わり語幹にしか付かない）との系統的關係が示唆されてきたが、イの主格助詞としての機能に疑問が提出されている（小学館『日本国語大辞典』項目「い」の補注）のは、けだし当然である。橋本進吉もすでに人称代名詞イがもとは指示代名詞（橋本 1969: 144）かと述べた。一方、G. J. Ramstedt, N. Poppe は *-i* が Altaic (Alt., Manchu III SG *i*; Mongolian III SG, gen. *in-u*; Turkish III SG, nom. *-i*) であるとみなした（Poppe 1965: 194）。しかし、Alt. の限定された機能だけで日本語のイの全体的用法を説明することは不可能である。珍説としてイが仏典の訓読文に現われることから、Miller は Kor. からの借用語とみた（ミラー 1981: 34-35）。訓点のために借用された助詞が代名詞として用いられることが言語史的にもありうるだろうか。すでにそれ以前に、このような考え方に対する反論が述べられている（新村 1940: 66）。

4 人称代名詞の体系

PCEMP で **i* は **si* と相関し、また **i* から属格 **n-i* および於格 **d-i* の前置詞が派生する。**i* を三人称単数主語代名詞とし、**si* を複数とする言語（Capell の *i/si* 形式、1976）が東部インドネシアのセラム島（CMP）からニューギニア島のほぼ全域（SHWNG+Oc）に拡がり、その周辺を単数 **na*、複数 **la* とする言語（Capell の *na/la* 形式）が取り巻く。ただし、*i/si* と *na/la* の混合した形式（*na/si*）をもつ Tanimbar, Kei（東部インドネシア）、Manam, Siassi（パプアニューギニア）のような言語も見られる。**si* は PAN **siDa* の語末音節消失形（apocope）、**la* は **siDa* の語頭音節消失形（aphaeresis）である。歴史的には *na/la* が古く、その後発生した *i/si* が *na/la* を周辺に押しやったのである。

表 3 で PAN の主語短縮形代名詞の体系（Dahl 1977）、および表 4 で PCEMP の変化形（Capell 1969; 1976）を示す。

なお、表 4 に **na* を追加し、一人称複数排除形の **ma* をパプアニューギニアの Muyuw (*yaka*)mey, Motu *mai* (属格)、ヴェヌアツの諸言語の *-mai*, *-mei*, *-mae* など

表 3

	SG	PL
		*ta (in.)
I	*ku	*mi (ex.)
II	*Su, *ka	*mu
III	*ia, *na	*siDa

表 4

	SG	PL
		*ta (in.)
I	*a, *ya	*mey (ex.)
II	*(k)u	*(k)wa
III	*i, *e, *na	*si, *se

から表のように改める。

オセアニア（メラネシア）の多くの言語は動詞句を中心とした「辞順」（*affix order*）をもつ。SVO や SOV というのは見掛けの語順で、前方照応した主語（目的語）接辞が動詞句を構成する順序は厳格である。オセアニアに偏在する *sv(o)* という構造をもつ点では CMP も SHWNG もオセアニア型に属する。東部インドネシア・セラム島の Alune では、

Kwali-ku i-keu mpai Piru.

「兄（姉）-私 彼-行く へ ピル = 私の兄がピルへ行く」

Ina-ku i-sabe tema peneka.

「母-私 彼女-買う バナナ 完了 = 私の母はバナナを買う」

Kwete-la meru si-ndene kuate.

「子供-複数 これら 彼ら-黙る まったく = この子供たちは黙ったまま」

Tamata hena si-abeli iane.

「人- 村 彼ら-売る 魚 = 村人たちは魚を売る」

のように *i-* と *si-* によって前方照応した主語（+human）の数が区別される。このような *i-*、*si-* による区別は、Alune の東に接する Wemale, Fatamanue などでも見出される。

パプアニューギニアの Manam では、

Áine i-lóngo.

「女 彼女-聞く = 女が聞く」

Áine péra i-rerét-aʔ-i.

「女 家 彼女-好む-他動詞-それ = 彼女は家が気に入っている」

Dang *di-éno*.

「水 それら-ある = 水がある」

となり、最後の例のように、集合性を表わす場合も *di* で受けられる。OIJp にも「涙シ流る」(『万葉集』3: 453) のような似た用法がある。Manam では、*i-*/**si-*> *di-* によって現実ムード、(**na-*>) *nga-/da-* によって非現実ムードを区別する新たなシステムが作り出された。

1) OIJp にもイと類似した機能をもつシが現われる。

a) 人称代名詞 (二人称・対等, 目下)。

「三枝の中にを寝むと愛しくシが語らえば」(『万葉集』5: 904)。

b) 指示代名詞 (それ, それら)。

「毎年に鮎シ走らば辟田川鶉八頭潜けて川瀬尋ねむ」(『万葉集』19: 4158)。

c) 主語の体言, 体言相当格に付く (副助詞)。

「赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装シ貴くありけり」(『古事記』上・歌謡)。

d) 連用修飾語に付く。

「大魚よシ鮪突く海人よシがあれば心恋しけむ」(『古事記』下・歌謡)。

この後のシは a) の用例である。

すでにふれたように、橋本進吉が、サ行子音が脱落するいくつかの具体例とともにシとイも指示代名詞として関係があると述べたのは卓見であった。このシは PCEMP **si* を継承する。複数機能は非限定をも表わすから¹¹⁾、二人称として転用されたシは婉曲的に対等者か目下に向けられる。またそのような婉曲性により、副助詞シが控え目な主観性を表明する (大野 1962: 502-503) と説明される。オセアニアにおいても、**si* が人称代名詞体系からはずれ、ソロモン諸島の Bgt., Lau などの *si*, Kwara'ae の *ti* が不定 (非限定) 代名詞 (不定冠詞) となるのも、非限定的機能に起因するためである。このシを Proto-Tungusic (Tng.) の二人称単数代名詞 **si* にあてる考えがあるが (村山 1974: 235)、意味変化の一般に反する。

2) OIJp には人称代名詞としてナが現われる。その用法は、一般的に二人称のほか一人称にも用いられていた。『日本書紀』(神代) に現われる神名「大己貫」のナ (己) は一人称の例とされるほか、

「愛子ナ (汝) セ (背) の君居り居りて物にイ行くとは」(『万葉集』16: 3885)

のような一人称例も見出される。OIJp の普通名詞「己」(おの=自身, 自分) は「お

のれ」として一人称も二人称も指すようになったように、ナも意味変化のうえからはもとは三人称とするのが妥当であろう。ナは PAN (PCEMP) の **na* と比較する。**na* は Siassi, Onjob (パプアニューギニア), ヴァヌアツの多くの言語 (Oc) で一人称単数 (その場合, 三人称単数は *i*) に意味変化する。

3) OIjp で旺盛に用いられ, OIjp 以降ワと取り代わった一人称単数のアがあった。

「ナが母に嘖られア (安) は行く」(『万葉集』14: 3519)。

このアは PCEMP の一人称単数 **a* と対応する。

4) OIjp の一人称代名詞ミ (乙類) も PCEMP の一人称複数 **mey* と対応すると考えられる。

「倭文手纏敷にも在らぬミ (身) には在れど千年にもがと思ほゆるかも」(『万葉集』5: 903)。

単数を複数で表現するのは「尊蔽の複数」化現象が OIjp でも行なわれたからである。中世においてミが、優越感をもつ男子の自称として用いられたのは、語源的なこの複数の機能に由来するものである。このような「身～一人称代名詞」の意味交替は、琉球宮古・多良間島方言の一人称複数包括形 *duu-taa* (<「胴」+ **ta* PCEMP I PL, incl., なお排除形があり *bee-taa*) に共通の発想による造語法が見出される。

5) PCEMP 三人称の単数 **e*, 複数 **se* の対はパプア湾岸添いの AN から再構成された形である。イリアンジャヤの Wandamen のように三人称複数が *si* (-human) / *se* (+human) で区別される例もあるが、分布は局地的である。OIjp でセ (=夫, 兄) とヤ行のエ (=兄, 姉) は、エがサ行子音を脱落した同じ語源とみなされることもある (橋本 1969: 144)。前者は女性から男性に対する, 後者は年長の男女に対する指称・呼称で重複する部分があるとはいえ, PCEMP の **i-e* (**i-* は人称冠詞?) / **se* に溯源可能とするならば, いずれも三人称代名詞の婉曲語法から発達したのである。

5 おわりに

表5に改めて, PCEMP を経て再構成された AnJp の人称代名詞体系を示す。表は崎山 (1990) に若干の変更が加えられている。

日本語形成の要素となった AN は, 語彙面では WMP を多く残す一方, 文法面では Oc の特徴が顕著である。これは, 縄文中期から古墳時代までの3千年間, AN が波状的に渡来したことに起因する。その渡来の時期を民俗語彙によって, Sakiyama

は「ハイ（南風）期」（縄文後期）、「ヨネ（米）期」（縄文晩期から弥生初期）、「ハヤト（隼人）期」（古墳期）に区分した（Sakiyama 1996）。考古学的には、オセアニアに紀元前2千年紀前半（ほぼ縄文中期）から紀元前数世紀まで、ラピタ土器文化が存在した。その

起源地は諸説あって明らかでないが、この土器文化の担い手が AN であったことは疑う余地はない。ただし、日本列島でこの土器は発見されてはいないものの（オセアニアではイリアンジャヤを含むニューギニア島海岸部、東部ポリネシアなどでもこの土器はみつかっていない）、南シナ海一帯を「ラピタ人」の原郷とみなし、縄文人をも含めてのラピタ人の起源を求める考え（片山 1991: 259）は本論とも関係し、考古学との接点として注目される。

なお、日本語・朝鮮語同系論は、江戸時代中期の新井白石までさかのぼる。白石は借用関係を論じているにすぎなかったが、それ以降の研究においては単に音形の類似したものを選び出し、しかも偶然の相似に加え、「同源語」とみなされた語の多くも借用語にすぎない（清瀬 1995: 41）と指摘される。Kor. も日本語と同様、長い形成の歴史をもつ言語であると考えられる。Kor. もアジアの大陸部で行なわれた混合語である可能性も否定できない。したがって、系統論的に縄文時代に両言語の祖語が存在するというような次元を越える現象が、両言語に発生していたとみるほうがよい。

混合日本語の形成に関与したもう一方の言語は Tng. である。表 6 に AN と Tng. のそれぞれの起源と要素を示す。SOV の Tng. では文法的な働きをする助詞・助動詞に相当する要素も豊富であり、AnJp は動詞・形容詞の活用語尾の多くを Tng. に負っている。OIJp には（現代日本語でも）連体修飾に二つの語順が存在するが、折口信夫は「逆語序」と呼び、言語混合の可能性を示唆した（折口 1955: 302, 408）。助詞のなかでもワ（=ハ）、ヲ、ヨリ、ユエ、ガ、ユ、ジ（最後の二例は OIJp まで）は明らかに Tng. 起源であるが、ニを Tng. に求めるのは困難で、音韻的にも意味的にも PAN *n-i（属格、与格、処格）に辿らざるを得ない。なお、詳しくは、崎山（1999）を参照されたい。また PAN の人称代名詞一人称複数数の包括・排除の区別を失ったのも、言語接触に基づく。ここにも日本語の形成における、深い混合の跡が認められる。

民族学的にはツングース民族は、紀元前1千年紀に東アジアに広がった、いわゆる

表 5

	SG	PL
I	*a, (*na)	*mæi
II	*na, (*i)	—
III	*i, *i-e	*si, *se

表 6

要素	Ancient Japanese	
	Tungusic	Austronesian
起 源		
活 用	助動詞	?
語 彙	少ない	多い
代名詞	?	多い
小 辞	接尾辞・助詞	接頭辞・連結辞
語 順	SOV	(SOV) ¹²⁾
修 飾	修飾語-被修飾語	被修飾語-修飾語

アルタイ化の担い手で日本列島が本格的にアルタイ化するのは、弥生時代からと推定されている（村山・大林 1973: 175）。この説のままだと、縄文後晩期とは約3千年の間隙があり、言語混合の開始の時期など、今後解明すべき問題はまだまだ残っている。

冒頭で述べた Michif の特徴を、Bakker (1994; 1997) により表7にまとめて示した¹³⁾。Cree と French

が混合し、Cree から辞順 (Vso) と後置詞、French から前置詞、語彙は Cree から動詞、French から名詞、Cree から人称代名詞、連体修飾は両言語から提供された。ここでも単純な話者数の論理は支配していない。結論として、Michif における Cree と French は、日本語の形成における Tng. と AN の役割に酷似するといえることができる。

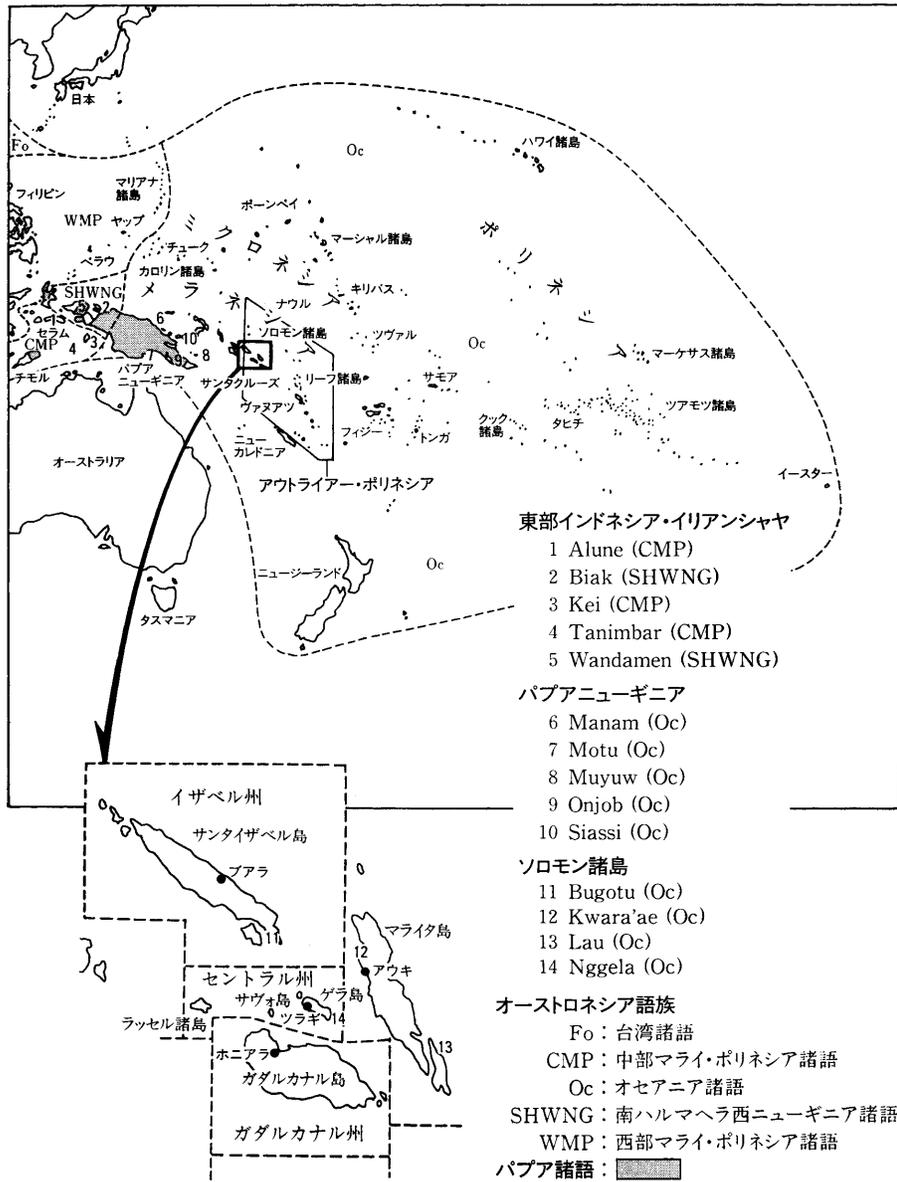
日本語はこれまで「孤立語」といわれ、あるいは Alt. と分類されてきた。しかし、Matthews and Polinsky (1996: 54), Polinsky and Smith (1996: 100), Mühlhäusler and Trew (1996: 373-374) では、日本語が Alt. (sic) と AN の混合語であると、明確に述べている。言語混合が再評価されているのは画期的である。すなわち、後者では、最近の言語接触研究の進捗によってピジン・クレオールあるいは混合言語という現象を説明しようとする理論的基準も整ってきており、日本語の系統についてもこのような分析手段によって再検討することは意義あることだ、と結んでいる。ただし、いずれも具体的な言語事例は示していない。

表 7

要素	Michif	
	Cree	French
起 源		
動 詞	多い	少ない
名 詞	少ない	多い
代名詞	すべて	
小 辞	後置詞	前置詞
語 順	Vso	(SVO)
修 飾	修飾語-被修飾語 (-OBV)	修飾語-被修飾語

(OBV: obviative suffix)

言語の比較は体系的に行なわなければならない。遺憾ながら、従来の日本語の系統研究の多くはこの原則が守られているとはいいたい面があった。本論は、AN との比較において核となる接頭辞、人称代名詞、語彙を体系として取り扱い、その具体的肉付けを試みたことになる。



オーストロネシア語族分布図 (番号は本論で言及した言語)
 崎山「オセアニアの言語分布1」『世界民族事典』2000, 弘文堂をもとに作図。

謝 辞

本論は、平成12年11月26日、瀬戸市の名古屋学院大学で開催された第121回日本言語学会大会の公開シンポジウム「日本語の系統：回顧と展望」で口頭発表した「オーストロネシア語族と日本語」に基づき、司会者（静岡県立大学名誉教授 松本克己氏）、コメンテーター、フロアの発言を斟酌し、当日配布された予稿集に加筆、修正したものである。また本研究報告に掲載のため査読されたレフェリーからも有益な意見をいただいた。それらすべての方がたに感謝したい。

注

- 1) この論文は、Colombo でわずか一週間行なわれた現地調査に基づいて書かれているため、隔靴搔痒の感があるのもやむを得ない。いずれ本格的な調査がなされるべき言語である。
- 2) 法律学・歴史学・言語学者の T. Mommsen によると、J. Caesar (B. C. 100-44) のころガリアの人口は約1千万人であった。さらに紀元2世紀には人口はその倍になった。しかし、結果として人口的にははるかに些少のローマ人により、5世紀末にはガリア語（ケルト語）は消滅した（村山 1967: 69）。
- 3) この3群に分ける発想は、崎山・小山・土取・藤井（1997: 68-69）ですでに述べている。
- 4) 周知のとおり、現代日本語の関東方言の一音節語は関西方言で二音節語で対応する。一音節形が新しい形であることは言うまでもないが（音声学的に単音から長音が発生する仕組みを説明するのはきわめて難しい）、このような AN 祖語形は、『名義抄』の OIjp につながる AnJp の複音節（長音節）の語源を考えるうえで示唆的である。
- 5) AnJp で基本となる色彩語彙は、語源的に「光」から「シロ」、「闇」から「クロ」、「空（そら）」から「アヲ」、「（日）昇」から「アカ」が比喩的に生み出されたことになる。現代語の「夜が白む」という表現のルーツは、「夜に光りがさす」ことであった。ただし、色彩語彙「シロ」「クロ」「アヲ」を派生する語尾（-o）あるいは母音交替（-a/-o）の起源については不明である。また「アコ」という形はない。PMP *awang は、マライ・ポリネシア人（台湾を除く）によって認知される、天と地の間の空間（airy interspace between heaven and earth）のことで（漢語「空」の字源は、穴居の天井の意味）、この部分が色として「アヲ（淡）/アヲ（青）」と認識されたのである。なお、Berlin and Kay (1969) の仮説では、すべての言語に第1ステージで「シロ」「クロ」があり、第2ステージで「アカ」が加わるといった内容であるが、語史的（語源的）にみた場合、最初からそのように色彩語彙として確立していたかどうか、疑わしいと思われる。たとえば、英語 white はインド・ヨーロッパ祖語の *kweit-「輝き」、black も *bhleg-「微光」（英語 blank、フランス語 blanc 「シロ」もこの語根から）に由来する。結果として、AnJp の「シロ、クロ、アヲ、アカ」と同じ体系は、チベット語色彩語彙の第1ステージでも認められる（長野 1982）。
- 6) 海南島の Poi Tsaan にたいし誤ったローマ字表記法（Utsat）が定着しかけているので要注意。
- 7) コメンテーターの発言に、このような接頭辞は自然発話における無意味な語中音添加（epenthesis）である、というのがあった。冗談もほどほどに！
- 8) 表2で、(=) はその諸語のなかから例示した言語、(+) はその言語に(■)が存在する（存在した）ことを表わす。
- 9) 「国のマほら-ぞ」（『万葉集』5: 800）、「大和は国のマほろ（二次形）-ば」（『古事記』中・景行）などにたいする音義説（美称-秀・穂-場所）は誤りである。多くの民族はみづからの世界や宇宙を描くとき、自己完結した「丸（円）」で表現する（キャンベル 1996）。AnJp に同じ発想があったとしても不思議ではない。

- 10) この *-i* は身体部分、親族名称、物の部分や位置を表わす語に付き、この *-i* を伴う語が「独立名詞」(independent substantives) と呼ばれる用法 (Ivens 1937-39: 738) とも関連する。すなわち、Lamalanga (ヴェヌアツ) では、人・ものから独立した *mata* 「目」を言うとき、*mata-i* といい、*mata-na* 「彼の(その)目」から区別される。
不思議なことに、国語学で「天(アマ) = 雨(アメ)」語源説はまだ定説となっていない。しかし、この間に関係があることを説く文学者は多い。一例として森 (1991: 58-59)。中西進にも同じ趣旨の発言があったが、文献が行方不明に。ちなみに、PAN **langiC* 「天」はオセアニアで「雨」に意味変化することが多い (Blust 1984)。
- 11) 複数が不定、広大、総体を意味するのは言語一般に認められ、「拡大的複数」(pluralis extensus) と呼ばれる。たとえば、英語 the high seas 「外洋」、Japanese waters 「日本水域」、フランス語 les ciels 「風土」(le ciel 「天」) などのように。
- 12) ニューギニアに至った AN のうち、パプア諸語との言語接触により、SVO が SOV に変化した言語があり、オーストロネシア語 2 型と呼ばれ、十数言語がこれに属する。
- 13) Michif の語順は、SVO, SOV, VSO, OVS, VOS, OSV のように比較的自由で、これは Cree の語順に従っているためである、と説明される (Bakker 1997: 87-88)。しかし、この語順は見掛けであって、文法的な主語 (s) と目的語 (o) 接辞の位置 (辞順 affix order) は Vso が厳格に守られている。したがって、見掛けの SVO は統辞論的には SVsoO (これ以外の語順でも同様) という Michif 本来の構造を継承していることになる。

文 献

- Adelaar, K. A.
1991 Some notes on the origin of Sri Lanka Malay. In H. Steinhauer (ed.) *Papers in Austronesian linguistics No. 1* (Pacific linguistics A-81), pp. 23-37.
- Bakker, P.
1994 Michif, the Cree-French mixed language of the Metis buffalo hunters in Canada. In P. Bakker and M. Mous (eds) *Mixed languages*, pp. 13-33. Amsterdam: Institute for Functional Research into Language and Language Use.
1997 *A language of our own*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Bellwood, P.
1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian archipelago*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Berlin, B. and P. Kay
1969 *Basic color terms: Their universality and evolution*. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.
- Blust, R. A.
1980 Austronesian etymologies. *Oceanic linguistics* 19(1-2), 1-181; 22-23(1-2), 29-149; -89 25(1-21), 1-123; 28(2), 111-180.
1984 Malaita-Micronesian: An Eastern Oceanic subgroup? *Journal of Polynesian society* 93(2), 99-140.
- キャンベル, J.
1996 飛田茂雄訳『時を越える神話』東京: 角川書店。
- Capell, A.
1969 *A survey of New Guinea languages*. Sydney: Sydney University Press.
1976 General picture of Austronesian languages, New Guines Area. In S. A. Wurm (ed.) *New Guinea area languages and language study Vol. 2* (Pacific linguistics C-39), pp. 5-52.
- Dahl, O. C.
1977 *Proto-Austronesian*. Lund: Studentlitteratur.
- 橋本進吉
1969 『助詞・助動詞の研究』東京: 岩波書店。
- 服部四郎
1967 「日本語はどこから来たか」『ことばの宇宙』2(4), 1-10.

- Holm, J.
2000 *An introduction to pidgins and creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ivens, W. G.
1937 A grammar of the language of Lamalanga, North Raga, New Hebrides. *Bulletin of the school of oriental studies* 9, 733-763.
- 片山一道
1991 『ポリネシア人——石器時代の遠洋航海者たち』京都：同朋舎出版。
- 清瀬義三郎則府
1995 「近世中期に遡る日韓国語同系論」『京都産業大学国際言語科学研究所報』17(1), 23-43.
- 小泉 保
1998 『縄文語の発見』東京：青土社。
- 小泉 保・尾本恵市
2000 「縄文語の発見(2)」(対談)『日本人と日本文化——その起源をさぐる』(文部省科学研究費特定領域研究 尾本プロジェクト室) 11, 8-11.
- 楠原佑介他編著
1981 『古代地名語源辞典』東京：東京堂出版。
- Lynch, J.
1998 *Pacific languages: An introduction*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Matthews, S.
1996 South and Southeast Asia. In B. Comrie, et al. (eds) *The atlas of languages*, pp. 56-71. New York: Facts On File, Inc.
- Matthews, S. and M. Polinsky
1996 Europa and Eurasia. In B. Comrie, et al. (eds) *The atlas of languages*, pp. 36-55. New York: Facts On File, Inc.
- ミラー, R. A.
1981 西田龍雄監訳『日本語とアルタイ諸語』東京：大修館書店。
- Miller, R. A.
1991 Japanese and Austronesian. *Acta Orientalia* 52, 148-168.
- 森 朝男
1991 「雨」『月刊言語・特集日本語のイメージ』20(1), 58-59.
- Mühlhäusler, P. and R. Trew
1996 Japanese language in the Pacific. In S. A. Wurm et al. (eds) *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas* (Trends in linguistics documentation 13), pp. 373-399. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 村山七郎
1967 「日本語系統論について」『ことばの宇宙』2(6), 67-70.
1974 『日本語の研究方法』東京：弘文堂。
- 村山七郎・大林太良
1973 『日本語の起源』東京：弘文堂
- 長野泰彦
1982 「色彩語彙」合田濤『現代の文化人類学①認識人類学』pp. 107-136, 東京：至文堂
- 大野 晋
1962 「補注」『日本古典文学体系7——万葉集四』東京：岩波書店。
- 折口信夫
1955 『折口信夫全集19』東京：中央公論社
- Polinsky, M. and G. Smith
1996 Pacific. In B. Comrie, et al. (eds) *The atlas of languages*, pp. 90-109. New York: Facts On File, Inc.
- Poppe, N.
1965 *Introduction to Altaic linguistics*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 阪倉篤義
1990 「古代日本語の内的再構——名詞の構成法を中心に」崎山理編『日本語の形成』

崎山 オーストロネシア語族と日本語の系統関係

pp. 279-310, 東京：三省堂。

崎山 理

1974 『南島語研究の諸問題』 東京：弘文堂。

1990 「古代日本語におけるオーストロネシア語族の要素」 崎山理編『日本語の形成』 pp. 99-122, 東京：三省堂。

1993 「日本語の系統とオーストロネシア語起源の地名」 埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』 pp. 73-86, 東京：朝倉書店。

1999 「日本語の起源」 佐原真・田中琢編『古代史の論点6——日本人の起源と地域性』 pp. 179-196, 東京：小学館。

崎山 理・小山修三・土取利行・藤井知昭

1997 「縄文の言葉と音楽」(フォーラム)『民博通信』78, 64-78.

Sakiyama, O.

1996 Formation of the Japanese language in connection with Austronesian languages. In T. Akazawa and E. J. E. Szathmáry (eds) *Prehistoric Mongoloid dispersals*, pp. 349-358. Oxford/New York/Tokyo : Oxford University Press.

新村 出

1940 『日本の言葉』 大阪：創元社。

Sebba, M.

1997 *Contact languages: Pidgins and creoles*. Humpshire: Macmillan Press Ltd.

Thomason, S. G. and T. Kaufman

1988 *Language contact, creolization and genetic linguistics*. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.

Tryon, D. T. and R. Gély (eds)

1979 *Gazetter of New Hebrides place names* (Pacific linguistics D-15).

Vovin, A.

1994 Is Japanese related to Austronesian? *Oceanic linguistics* 33(2), 369-390.

Wurm, S. A. and B. Wilson

1975 *English finderlist of reconstructions in Austronesian languages* (Pacific linguistics C-33).

安本美典

1998 「上代特殊仮名遣いと後置定冠詞」『月刊言語』27(7), 81-88.

Zorc, R. D.

1993 Overview of Austronesian and Philippine accent patterns. In J. D. Edmondson and K. J. Gregerson (eds) *Tonality in Austronesian languages*, pp. 17-24. Honolulu: University of Hawai'i Press.